

線形代数

第13回「内積」

萩野 達也

hagino@sfc.keio.ac.jp

<https://vu5.sfc.keio.ac.jp/slide/>

今日の内容

- 内積に関する話題に関して解説する
 1. 内積, 正規直交基底
 2. グラム・シュミットの正規直交化法
 3. 計量線形性, 直交行列

内積

定義13.1

- \mathbb{R}^n 上の内積を, $\mathbf{x} = \begin{bmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{bmatrix}$, $\mathbf{y} = \begin{bmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{bmatrix}$ に対して

$$(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = {}^t \mathbf{x} \mathbf{y} = [x_1, \dots, x_n] \begin{bmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{bmatrix} = \sum_{i=1}^n x_i y_i \in \mathbb{R}$$

で定義する.

- また, $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$ のノルム (長さ) を次で定義する.

$$\|\mathbf{x}\| = \sqrt{(\mathbf{x}, \mathbf{x})} = \sqrt{\sum_{i=1}^n x_i^2}$$

双線形性

定理13.2

- 内積は写像 $(\cdot, \cdot): \mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ であり,
- 任意の $x, y, z \in \mathbb{R}^n, a \in \mathbb{R}$ に関して以下が成り立つ.

1. $(x + y, z) = (x, z) + (y, z)$

2. $(a x, y) = a (x, y)$

3. $(x, y + z) = (x, y) + (x, z)$

4. $(x, a y) = a (x, y)$

- これらを内積の**双線形性**という.

- たとえば

$$(a x + b y, c z + d w) = a c (x, z) + a d (x, w) + b c (y, z) + b d (y, w)$$

- さらに, 任意の $x, y \in \mathbb{R}^n$ に関して以下が成り立つ.

5. $(x, y) = (y, x)$

6. $(x, x) \geq 0$

7. $(x, x) = 0 \Leftrightarrow x = 0$

シュワルツの不等式

定理13.3(シュワルツの不等式)

- 任意の $x, y \in \mathbb{R}^n$ に対して

$$|(x, y)| \leq \|x\| \|y\|$$

- 等号成立の必要十分条件は x, y が一次従属であること.

- 不等式を具体的に書けば

$$\left| \sum_{i=1}^n x_i y_i \right| \leq \sqrt{\sum_{i=1}^n x_i^2} \sqrt{\sum_{i=1}^n y_i^2}$$

シュワルツの不等式(証明)

- $y = 0$ であれば両辺とも 0 であるから成り立つ.
- そこで, $y \neq 0$ と仮定する.
- $k = \frac{(x,y)}{\|y\|^2}$ とおくと

$$\begin{aligned} 0 &\leq \|x - k y\|^2 \\ &= \|x\|^2 - 2k(x, y) + k^2 \|y\|^2 \\ &= \|x\|^2 - 2 \frac{(x, y)^2}{\|y\|^2} + \frac{(x, y)^2}{\|y\|^2} \\ &= \|x\|^2 - \frac{(x, y)^2}{\|y\|^2} \end{aligned}$$

- これより $(x, y)^2 \leq \|x\|^2 \|y\|^2$ であり, $|(x, y)| \leq \|x\| \|y\|$ となる.
- 等号が成り立つのは $x - k y = 0$ のときに限る.
- つまり, x, y は一次従属.

三角不等式

定理13.4(三角不等式)

- 任意の $x, y \in \mathbb{R}^n$ に対して

$$\|x + y\| \leq \|x\| + \|y\|$$

- 等号成立の必要十分条件は, x, y が一次従属であること.

証明

- 直接計算で示すことができる.

$$\begin{aligned}\|x + y\|^2 &= \|x\|^2 + 2(x, y) + \|y\|^2 \\ &\leq \|x\|^2 + 2\|x\|\|y\| + \|y\|^2 && (\because \text{定理13.3}) \\ &= (\|x\| + \|y\|)^2\end{aligned}$$

極化恒等式

定理13.5(極化恒等式)

- 任意の $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in \mathbb{R}^n$ に対して

$$(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \frac{1}{4} \|\mathbf{x} + \mathbf{y}\|^2 - \frac{1}{4} \|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|^2$$

証明

- 右辺を計算で示すことができる.

$$\|\mathbf{x} + \mathbf{y}\|^2 = \|\mathbf{x}\|^2 + 2(\mathbf{x}, \mathbf{y}) + \|\mathbf{y}\|^2$$

$$\begin{array}{r} -) \\ \hline \|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|^2 = \|\mathbf{x}\|^2 - 2(\mathbf{x}, \mathbf{y}) + \|\mathbf{y}\|^2 \end{array}$$

$$\|\mathbf{x} + \mathbf{y}\|^2 - \|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|^2 = 4(\mathbf{x}, \mathbf{y})$$

角度・直交性

定義13.6

- シュワルツの不等式(定理13.3)より

$$-1 \leq \frac{(x, y)}{\|x\| \|y\|} \leq 1$$

であるから

$$\cos \theta = \frac{(x, y)}{\|x\| \|y\|}$$

となる $0 \leq \theta \leq \pi$ が存在する.

- この θ を x, y のなす **角度** という.
- $\theta = \frac{\pi}{2}$ (つまり $(x, y) = 0$) であるとき, x, y は **直交** するという.
- 定義より, $0 \in V$ は全ての元と直交する.

正規直交性

定義13.7

- $v_1, \dots, v_k \in \mathbb{R}^n$ が**正規直交**であるとは

$$(v_i, v_j) = \delta_{ij} = \begin{cases} 1 & (i = j) \\ 0 & (i \neq j) \end{cases}$$

となることをいう. (δ_{ij} : クロネッカーのデルタ)

- つまり, v_1, \dots, v_k が正規直交であるとは,
 1. 各ベクトル v_i の長さが 1 である: $\|v_i\| = 1$
 2. $i \neq j$ であれば, v_i, v_j が直交する: $(v_i, v_j) = 0$

正規直交性と一次独立

定理13.8

- $\boldsymbol{v}_1, \dots, \boldsymbol{v}_k \in \mathbb{R}^n$ が正規直交であれば一次独立である.

証明

- $\sum_{i=1}^k c_i \boldsymbol{v}_i = \mathbf{0}$ とすると

$$\left(\sum_{i=1}^k c_i \boldsymbol{v}_i, \boldsymbol{v}_j \right) = \sum_{i=1}^k c_i (\boldsymbol{v}_i, \boldsymbol{v}_j) = c_j \|\boldsymbol{v}_j\|^2 = c_j$$

- 一方で, $(\mathbf{0}, \boldsymbol{v}_j) = 0$ であるから $c_j = 0$ であり, $\boldsymbol{v}_1, \dots, \boldsymbol{v}_k$ は一次独立.
- 一般に, 一次結合の係数が内積で取り出せる事実は重要である.

$$\left(\sum_{i=1}^k c_i \boldsymbol{v}_i, \boldsymbol{v}_j \right) = c_j$$

正規直交基底

定義13.9

- $v_1, \dots, v_n \in \mathbb{R}^n$ が**正規直交基底**であるとは、基底かつ正規直交であることをいう.

- 例えば, \mathbb{R}^n 標準基底

$$e_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix}, e_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ \vdots \\ 0 \end{bmatrix}, \dots, e_n = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 1 \end{bmatrix}$$

は正規直交基底である.

正規直交基底(例)

例13.10

- \mathbb{R}^2 の正規直交基底として $\frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \end{bmatrix}$ や $\frac{1}{\sqrt{5}} \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \end{bmatrix}, \frac{1}{\sqrt{5}} \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \end{bmatrix}$ を考えることができる。

- 実際, 例えば

$$\left\| \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ \pm 1 \end{bmatrix} \right\|^2 = \left(\frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ \pm 1 \end{bmatrix}, \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ \pm 1 \end{bmatrix} \right) = 1$$

$$\left(\frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \end{bmatrix} \right) = 0$$

正規直交基底

- 正規直交基底 $v_1, \dots, v_n \in \mathbb{R}^n$ が与えられたとき, 任意の $x \in \mathbb{R}^n$ は

$$x = \sum_{i=1}^n x_i v_i \quad x_i = (x, v_i)$$

と書くことができる.

- $y = \sum_{i=1}^n y_i v_i$ との内積は

$$(x, y) = \left(\sum_{i=1}^n x_i v_i, \sum_{i=1}^n y_i v_i \right) = \sum_{i=1}^n x_i y_i$$

- 特に $x = y$ として

$$\|x\|^2 = \sum_{i=1}^n x_i^2$$

射影

定義13.11

- 長さ 1 のベクトル $u \in \mathbb{R}^n$ に対して, u 方向への射影を次で定義する.

$$p_u: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}\langle u \rangle, \quad v \mapsto (v, u) u$$

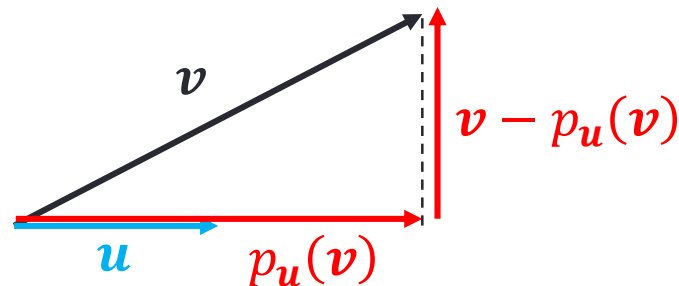
- p_u は v を直線 $\mathbb{R}\langle u \rangle$ へ直交射影する線形写像である.
- 実際

$$\begin{aligned} (u, v - p_u(v)) &= (u, v - (v, u) u) \\ &= (u, v) - (v, u) \|u\|^2 = 0 \end{aligned}$$

であり, 直交分解

$$v = p_u(v) + (v - p_u(v))$$

が成り立っている.



グラム・シュミットの正規直交化法

- 任意の一次独立なベクトル $v_1, \dots, v_k \in \mathbb{R}^n$ に対して, 正規直交するベクトル $w_1, \dots, w_k \in \mathbb{R}^n$ で

$$\mathbb{R}\langle w_1, \dots, w_k \rangle = \mathbb{R}\langle v_1, \dots, v_k \rangle$$

なるものを構成する標準的な方法が存在する.

- より厳密には, 任意の $1 \leq i \leq k$ に対して

$$\mathbb{R}\langle w_1, \dots, w_i \rangle = \mathbb{R}\langle v_1, \dots, v_i \rangle$$

が成り立つ.

- この構成法は, **グラム・シュミットの正規直交化法**と呼ばれる.
- 特に $k = n$ として, 任意の基底から正規直交基底が得られる.

グラム・シュミットの正規直交化法(1)

- (ステップ1): まず

$$w_1 = \frac{v_1}{\|v_1\|}$$

と定義する.

- このとき

$$\|w_1\|^2 = \left(\frac{v_1}{\|v_1\|}, \frac{v_1}{\|v_1\|} \right) = \frac{\|v_1\|^2}{\|v_1\|^2} = 1$$

であるから, w_1 は長さ 1 に正規化されている.

- (ステップ2): 次に

$$w'_2 = v_2 - p_{w_1}(v_2)$$

と定義する.

- v_1, v_2 は一次独立であるから, $w'_2 \neq 0$ であり, w'_2 は v_2 を w_1 方向と直交分解したもののなので, w'_2 は w_1 と直交する.
- そして, 次のように w_2 を定義することで長さを 1 に正規化する.

$$w_2 = \frac{w'_2}{\|w'_2\|}$$

グラム・シュミットの正規直交化法(2)

- (ステップ3):次に

$$\mathbf{w}'_3 = \mathbf{v}_3 - p_{\mathbf{w}_1}(\mathbf{v}_3) - p_{\mathbf{w}_2}(\mathbf{v}_3)$$

と定義する.

- \mathbf{w}'_3 は \mathbf{v}_3 から \mathbf{w}_1 方向への射影と \mathbf{w}_2 方向への射影を除いたものなので, \mathbf{w}_1 と \mathbf{w}_2 に直交する.
- そして, 次のように長さを 1 に正規化する.

$$\mathbf{w}_3 = \frac{\mathbf{w}'_3}{\|\mathbf{w}'_3\|}$$

- この手続きを繰り返す
- (ステップ j):まず

$$\mathbf{w}'_j = \mathbf{v}_j - \sum_{i=1}^{j-1} p_{\mathbf{w}_i}(\mathbf{v}_j)$$

と定義し, 次に

$$\mathbf{w}_j = \frac{\mathbf{w}'_j}{\|\mathbf{w}'_j\|}$$

で長さを 1 に正規化する. このとき $\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_k$ は正規直交する.

グラム・シュミットの正規直交化法(例)

- \mathbb{R}^2 の基底 $v_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}$, $v_2 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix}$ にグラム・シュミットの正規直交化法を適用する.

- まず

$$w_1 = \frac{v_1}{\|v_1\|} = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}$$

- 次に

$$\begin{aligned} w_2' &= v_2 - (v_2, w_1) w_1 \\ &= \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix} - \frac{1}{\sqrt{2}} \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix} = \frac{1}{2} \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

- したがって, 正規直交基底

$$w_1 = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix} \quad w_2 = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \end{bmatrix}$$

を得る.

- 一方で, 基底順番を入れ替えて $v_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix}$, $v_2 = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \end{bmatrix}$ に適用すると, 別の正規直交基底を得る.

$$w_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix} \quad w_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix}$$

グラム・シュミットの正規直交化法(例)

- \mathbb{R}^3 の基底 $\mathbf{v}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}$, $\mathbf{v}_2 = \begin{bmatrix} -1 \\ 1 \\ 3 \end{bmatrix}$, $\mathbf{v}_3 = \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{bmatrix}$ に正規直交化法を適用する。

- まず

$$\mathbf{w}_1 = \frac{\mathbf{v}_1}{\|\mathbf{v}_1\|} = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}$$

- 次に

$$\mathbf{w}'_2 = \mathbf{v}_2 - (\mathbf{v}_2, \mathbf{w}_1) \mathbf{w}_1 = \begin{bmatrix} -1 \\ 1 \\ 3 \end{bmatrix} - \sqrt{2} \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -2 \\ 1 \\ 2 \end{bmatrix} \quad \mathbf{w}_2 = \frac{\mathbf{w}'_2}{\|\mathbf{w}'_2\|} = \frac{1}{3} \begin{bmatrix} -2 \\ 1 \\ 2 \end{bmatrix}$$

- 最後に

$$\mathbf{w}'_3 = \mathbf{v}_3 - (\mathbf{v}_3, \mathbf{w}_1) \mathbf{w}_1 - (\mathbf{v}_3, \mathbf{w}_2) \mathbf{w}_2 = \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{bmatrix} - \frac{3}{\sqrt{2}} \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix} - \frac{11}{33} \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{bmatrix} = -\frac{5}{8} \begin{bmatrix} -1 \\ -4 \\ 1 \end{bmatrix}$$

- よって、以下の正規直交基底が得られる。

$$\mathbf{w}_1 = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}, \mathbf{w}_2 = \frac{1}{3} \begin{bmatrix} -2 \\ 1 \\ 2 \end{bmatrix}, \mathbf{w}_3 = \frac{\sqrt{2}}{6} \begin{bmatrix} -1 \\ -4 \\ 1 \end{bmatrix}$$

計量線形性

定義13.12

- n 次正方行列 A が定義する線形写像 $f_A: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n$ が計量線形 (もしくは計量を保つ) とは, 任意の $x, y \in \mathbb{R}^n$ に対して

$$(f_A(x), f_A(y)) = (x, y)$$

が成り立つこと.

- f_A が計量線形であるとき, f_A は単射となる.
- まず, $f_A(x) = \mathbf{0}$ とすれば

$$0 = \|f(x)\|^2 = \|x\|^2$$

より, $x = \mathbf{0}$ である. つまり計量線形写像はベクトルの長さや角度を変えないので, ベクトルが潰れることはない.

- さらに, $f_A(x) = f_A(y)$ とすれば, 線形性より $f_A(x - y) = \mathbf{0}$ であるが, 上に示したことより, $x - y = \mathbf{0}$. よって $x = y$.

直交行列

定義13.13

- n 次正方行列 A が直交行列であるとは

$${}^t A A = E_n$$

が成り立つこと. つまり, $A^{-1} = {}^t A$.

- \mathbb{R}^n の内積が

$$(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = {}^t \mathbf{x} \mathbf{y} = [x_1, \dots, x_n] \begin{bmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{bmatrix} = \sum_{i=1}^n x_i y_i$$

で与えられることを思い出す.

直交行列の性質

定理13.14

- n 次正方行列 A に関して次は同値である.
 1. A は直交行列である.
 2. $f_A: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n, v \mapsto Av$ は計量線形である.
 3. A の列ベクトルは \mathbb{R}^n の正規直交基底である.

証明

- $1 \Rightarrow 2$: 一般に行列の積の転置に関して ${}^t(B C) = {}^t C {}^t B$ に注意すると

$$(A x, A y) = {}^t(A x) A y = ({}^t x {}^t A) A y = {}^t x ({}^t A A) y = {}^t x y = (x, y)$$
- $2 \Rightarrow 3$: $f_A: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n, e_i \mapsto A e_i$ であって、正規直交基底の計量線形写像の像は正規直交基底になるため.
- $3 \Rightarrow 1$: $({}^t A A)_{ij} = (A e_i, A e_j) = \delta_{ij}$ より, ${}^t A A = E_n$.

まとめ

- 内積に関係する話題に関して説明した.
 1. 内積, 正規直交基底
 2. グラム・シュミットの正規直交法
 3. 計量線形性, 直交行列